

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

「移民国」ドイツの排外主義：グローバル化のなかの国民国家

著者	佐藤 成基
雑誌名	科学研究費助成事業 研究成果報告書
ページ	1-4
発行年	2018-06-21
URL	http://hdl.handle.net/10114/00022287

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

科学研究費助成事業 研究成果報告書



平成 30 年 6 月 21 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K03874

研究課題名(和文)「移民国」ドイツの排外主義ーグローバル化のなかの国民国家ー

研究課題名(英文) Xenophobia in Germany as a "Country of Immigration: The Nation-State in Globalization

研究代表者

佐藤 成基 (SATO, Shigeki)

法政大学・社会学部・教授

研究者番号：90292466

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000 円

研究成果の概要(和文)：この研究は「ペギーダ」やAfDのディスコースを検討しながら、近年ヨーロッパで台頭している排外主義や右翼ポピュリスト政党に関する新たな視座を提供した。特に右翼ポピュリズムについてはこれまで、「左と右」という対立軸で語られることが多かった。しかしAfDは「ナショナル対グローバル」という対立軸を用いて、「世界に開かれた」(「グローバル」な)連邦政府や主要政党を攻撃し、自国民優先の主張を打ち出し、正当化した。「左と右」の対立軸と交差する関係にあるこの対立軸により、AfDは幅広い政治的スペクトルからの支持を獲得し、旧来の極右の狭いニッチを超えた広い支持層を確立することにある程度成功した。

研究成果の概要(英文)：Examining narratives of "Pegida" and the AfD in the German public discourse, this research provides a new perspective on xenophobia and right-wing populism, which recently emerged in Europe. Right-wing populism, in particular, is commonly discussed in terms of the "left-right" political spectrum. But the AfD uses a dichotic code of "national vs. global" to attack the policies and politics of the "world-open", allegedly globally-oriented federal government and major political parties and to hail the primacy of national interests and legitimize national citizens favoritism. By evoking this dichotic code, which cross-cuts the existing "left-right" dichotomy, the AfD succeeds, to some extent, to gain votes from a wide political spectrum and establish social bases of supporters beyond the narrow "niches" of the extreme right.

研究分野：社会学，ナショナリズムと国民国家の比較歴史社会学的研究

キーワード：排外主義 右翼ポピュリズム ペギーダ AfD ナショナリズム 国民国家 移民 難民

1. 研究開始当初の背景

1990年代まで「移民国ではない」と公式に称してきたドイツ連邦共和国は、1990年代末以後大きく転換してきた。1999年には1913年制定以来の国籍法を改定し、出生地主義を加味した新たな国籍制度を確立し、また2004年には「移民法」を制定した。2005年に成立したメルケル政権は、移民の「統合」を重要な政策課題として掲げ、連邦レベルにおいて積極的な移民統合政策の推進を開始した(佐藤 2011)。2014年には保守勢力の強硬な反対によって実現されなかった重国籍が、ドイツ生まれの移民に対して限定付きで認められることが決定された。また、労働力不足が問題になっているなか、2012年にEUブルーカード制により大卒の高度技術労働者を(期限付きながら)受け入れることにもなっていた。

しかし、このように「非移民国」から「移民国」へと転換しつつあることが明らかであったドイツにおいて、同時に他のヨーロッパ諸国と同様、排外主義の高まりも見られた。今世紀に入ってから世界的なイスラム原理主義の高まりを受け、イスラム系移民がドイツ社会の「自由で民主的」な規範に挑戦し、治安を悪化させているという反イスラム主義的主張が広まってきた。また、2010年にベストセラーになったティロ・ザラツィンの『ドイツは消滅する』は、自力で労働せずに社会保障費に依存し、子どもを学校に通わせないイスラム系移民を「統合の意志を持たない」人々として厳しく批判し、多くのドイツ人の共感を喚び起した。そして近年では、EU加盟国であるルーマニア、ブルガリア等からの「貧困移民」がドイツの社会保障費を「乱用」しているという非難が起こっている。また、2010年以後、アフリカや中東での政変や内戦の激化に伴う難民の急増に対し、難民の流入の管理・制限の強化をめぐる声も高まっていた。そして何よりも重要だったのは、2014年10月ころから、ドレスデンを中心に、「イスラム化」に反対する「ペギダ(Pegida)」と称されるデモが開始されたことである。さらには2013年に「反ユーロ」を掲げて結成されたAfD(ドイツのための選択肢)が、2014年のEU議会選挙や州議会選挙で顕著に勢力を伸ばし始めていた。結党当初のAfDは、必ずしも反移民を掲げた右翼ポピュリスト政党とは明言し難かったものの、2014年の州議会選挙のころから反移民・反イスラムといった排外主義的主張を明示的に掲げるようになっていた。

このように本研究が開始される当初(申請書提出時期の2014年9月頃)、まさに排外主義が政治運動や政党として表面化しつつあった。周辺の欧州諸国の多くにおいてすでに力を持っていた右翼ポピュリスト政党も、やはりドイツにおいて台頭しつつあった。

2. 研究の目的

本研究はこのような当時目立ち始めていたドイツにおける排外主義の様相を、議会政治やメディアにおける移民・難民に対する排外主義的ディスコースを素材にしながら検討し、さらにそれを他の先進諸国(特にヨーロッパ諸国)の排外主義と比較することを目的として始められた。

当初の仮説は、このような排外主義がドイツ民族の純粋性や伝統文化の同質性の保持を目指すような旧来のナショナリスト的関心ではなく、治安や法秩序の安定や社会保障等といった社会的なセキュリティ(安全・安心な生活の保障)への関心によって動機づけられ、正当化されるというものであった。ドイツには露骨に自民族・自国民中心主義を打ち出す民族至上主義的(フェルクッシュ)でレイシスト的な極右政党(NPDなど)があるが、極右政党が勢力を伸ばしているわけではない。むしろ近年の新しい形の排外主義は、いわば「脱極右」化され、露骨なレイシズムに対して批判的であるドイツ社会の主流の人々にまで受け入れられるようになっていく。そこで強くアピールされるのが、ドイツ社会における治安の悪化、学校教育のレベルの低下、社会保障制度の危機といった、社会生活の上でこれまで前提とされてきた広い意味でのセキュリティの変化に対する不安(insecurity)なのである。それが近年のドイツ社会において排外主義が、旧来の党派対立を越えて広まっていることの原因であると考えることができる。

本研究では、主として政治や政策の場面で論じられる排外主義のディスコースにおいて、「ナショナル」な関心とこの社会的セキュリティ上の関心とがどのように相互に関連し、表明されているのかを考察することを目指した。これにより、排外主義をネオナチと同一視してしまうことの多い日本では見逃されがちな、「移民国」ドイツの排外主義の新たな様相を明らかにすることができると思われる。

また同時に本研究の一環として、理論的枠組みの構築のため、ロジャーズ・ブルーベーカーの論文を編集・翻訳する計画を立てた。

3. 研究の方法

本研究の中心をなす排外主義のディスコース分析において、主として媒体を用いた。

第一は、新聞・雑誌である。新聞は*Frankfurter Allgemeine*、*Süddeutsche Zeitung*、*Welt*などの主要紙、週刊新聞の*Die Zeit*、大衆紙*Bild*などのドイツで有名な新聞のほか、必要に応じて地方紙も用いた。雑誌は*Spiegel*や*Focus*などを用いた。その多くは日本の図書館やインターネットでアクセス可能だったが、一部はドイツの図書館で収集した。

第二は議会の議事録や疑似資料である。これは現在、ほとんどがインターネットで閲覧できる。

第三に、ペギーダやAfDなどの街頭での演説（これは今回極めて重要な資料となったが）は、Youtube などインターネットの動画配信を用いた。また、ドイツのテレビで報道されたルポのメディア・アーカイブ（インターネットで自由にアクセス可能）も資料の一部として用いた。

また、割合としてごく一部に過ぎないが、ドイツ滞在中にペギーダのデモに参加し、フィールドノートに資料に用いた。

4. 研究成果

まず大きな「成果」は、研究開始以降、ドレスデンでのペギーダの発生、「難民危機」とAfDの台頭という歴史的現場にリアルタイムで向かい合うことができたということである。そのため、2015年から2017年までの本研究の研究機関、研究代表者はそのほとんどをペギーダとAfDの動向の観察、ペギーダのデモやAfDに所属する政治家たちのディスコースのフォロー及び分析に時間とエネルギーを注いだ。ドイツ滞在中は、ペギーダのデモに参加したほか（残念ながらAfDの集会には参加できなかったが）、ベルリンにある難民収容施設を訪れ、地域住民と収容施設の関係について観察した。

このような3年間に及ぶ観察、資料収集、分析の結果、当初の仮説は一定程度支持された。確かに、社会的セキュリティへの不安（治安や社会保障への不安や不満）が2014年末のペギーダのデモや2015年秋の「難民危機」直後のAfDの政治家たちのスピーチにおいて常に中心的なテーマとしてとりあげられていただけでなく、デモ参加者の発言からも明確に表明されていた。ペギーダやAfDの演説においては、現状を「社会国家の危機」や、「治安の悪化」という観点から把握し、それを反移民・難民の主張へとつなげていく論理が広く見られた。この論点は、「なぜ「イスラム化」に反対するのか—ドイツにおける排外主義の論理と心理」（2018年）のなかで明らかにした（執筆したのは2016年夏）。

しかしその後AfDが支持率を伸ばし、議会への進出が進み、ドイツの政党システムの一角に食い込んでいくなかで、当初の仮説をさらに修正・拡大していく必要に迫られた。AfDが一定の定型化された政治的言論の枠組みのなかで自己の主張を行なっていることが明らかになってきたのである。すなわちAfDは、「左対右」という従来の政治的対立軸には回収することのできない「グローバル対ナショナル」という対立軸を打ち出し、「世界に開かれた」（＝「グローバル」な）連邦政府や主要政党の政策を批判し、「自国優先」の（＝「ナショナル」な）政策を要求するというスタンスを明確にすることで、従来の極右の支持者を越える社会的支持層の開拓にある程度成功していたのである。社会的セキュリティの問題も、自国民の社会的セキュリティの問題として提起され、難民よりも「自

国民を優先する」という原理のなかに集約された。これによりAfDは、「排外主義」「レイシスト」という批判に対し、「グローバル対ナショナル」という、政治的により普遍的な対立図式によって自己のスタンスを正当化し、かなり広範な社会層に訴えることが可能になったのである。

本研究はこのような見方からAfDをはじめとする欧州の右翼ポピュリズム全般を捉え直す枠組みを構想した。右翼ポピュリズムは従来の「左対右」の対立軸には完全に回収されることのない「グローバル対ナショナル」という別の対立軸を打ち出し、それに依拠して既存政党や政府の「世界に開かれた」姿勢を批判し、また問題解決の方法として「自国民優先」の原則を主張したこと、またこれにより、従来「左右」の軸で捉えられてきた問題が「グローバル対ナショナル」の枠組みで捉えなおされ、それが従来の狭い「極右」ニッチを超える幅広い有権者（「普通の市民」たち）の関心・感情を捉えることに一定程度成功することにつながったことが明らかにされた。さらに、この「グローバル対ナショナル」という政治的対立図式は、グローバル化がもたらした「勝者」と「敗者」（D.グッドハートいう「どこにでも行ける人々」と「どこかに留まる人々」との階層分化と共鳴し合うという点に関しても、予備的な考察を行なった。その現時点での到達点として、「グローバル化のなかの右翼ポピュリズム—ドイツAfDの事例を中心に」を執筆し、研究代表者の主催する研究会で報告した後、現在学術雑誌に投稿中である。

ブルーベーカーの編集・翻訳については、2016年の年末に法政大学社会学研究科博士課程の学生および修了者3名とともに『グローバル化する世界と「帰属の政治」—移民・シティズンシップ・エスニシティ』を明石書店から出版し、研究代表者がその「解説」を執筆した。また、この本に収録された論文の一つで提起されている「人種、エスニシティ、ネーションに関する認知アプローチ」に関してさらに詳細に紹介するため、論文を一本執筆した（「カテゴリーとしての人種、エスニシティ、ネーション—ロジャース・ブルーベーカーの認知的アプローチについて」）。なお、明石書店から出版された編集・翻訳本は出版後半年ほどで重版されることになった。現在、この移民、シティズンシップ、エスニシティ、ナショナリズムといった分野の研究者の間で、一定の影響力を持つに至っている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

佐藤成基「国民国家と外国人の権利—戦後ドイツの外国人政策から」『社会志林』第63巻第4号、2017年、59-97頁（査読無）

佐藤成基「カテゴリーとしての人種、エスニシティ、ネーション - ロジャース・ブルーベイカーの認知的アプローチについて - 」『社会志林』第 64 巻, 第 1 号, 2017 年, 21-48 頁 (査読無)

〔学会発表〕(計 1 件)

佐藤成基「ロジャース・ブルーベイカーの認知的アプローチ - その人種・エスニシティ・ネーション研究にとっての意義 - 」第 89 回日本社会学会大会 (九州大学, 2016 年 10 月 8 日)

〔図書〕(計 4 件)

佐藤成基「なぜ「イスラム化」に反対するのか—ドイツにおける排外主義の論理と心理」樽本英樹編『排外主義の国際比較』ミネルヴァ書房, 2018 年, 85-124 頁

佐藤成基「グローバル化する世界において「ネーション」を再考する - ロジャース・ブルーベイカーのネーション中心のアプローチについて」, ロジャース・ブルーベイカー (佐藤成基・高橋誠一・岩城邦義・吉田公記編訳)『グローバル化する世界と「帰属の政治」— 移民・シティズンシップ・国民国家』明石書店, 2016 年, 303-341 頁

佐藤成基「「ドイツ人」概念の変容 - 「系ドイツ人」から考える」, 駒井洋監修・佐々木てる編集『移民・ディアスポラ研究 5 マルチ・エスニック・ジャパニーズ系日本人の変革力』明石書店, 2016 年, 42-69 頁

佐藤成基「国民国家とシティズンシップの変容」, 佐藤成基・宮島喬・小ヶ谷千穂編著『国際社会学』有斐閣, 2015 年, 第 1 章, 13-30 ページ

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称 :
発明者 :
権利者 :
種類 :
番号 :
出願年月日 :
国内外の別 :

取得状況 (計 0 件)

名称 :
発明者 :
権利者 :
種類 :
番号 :

取得年月日 :
国内外の別 :

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 成基 (SATO, Shigeki)
法政大学・社会学部・教授
研究者番号 : 90292466